Yoshihiro Nishiaki and Toshio Matsutani (eds.)

*Tell Kosak Shamali-The Archaeological
Investigations on the Upper Euphrates,
Syria Vol. 1 Chalcolithic Architectures
and the Earlier Prehistoric Remains,*

UMUT Monograph 1. Tokyo:

The University Museum, The University of Tokyo/
Oxford: Oxbow Books, 2001, 240p.

(ISBN 1 84217 052X, 60 US dollars)

常 木 晃^{*}
TSUNEKI Akira

前 田 修^{**}
MAEDA Osamu

本書は、東京大学東洋文化研究所・総合研究博物館の手によって1994～1997年に発掘調査、1998・1999年に整理研究が実施された、北シリアに位置するテル・コサック・シャマリ遺跡の本報告書第1巻である。同遺跡の発掘調査は、トルコ国境のユーフラテス河に計画されたティシュリーン・ダム建設に伴う緊急調査の一環として実施され、良好な残りのウバイド期、ポスト・ウバイド期の焼失土器工房が発見されたことで衆目を集めた。本書には遺構を含む発掘記録、旧石器時代・新石器時代遺物の分析および、遺跡とその周辺の考古地質学的研究、社会人類学的研究の成果が、15名の研究者達の分担執筆により収録されている。遺物の自然科学的分析や大量に出土したウバイド土器の報告に関しては続巻が準備されており、発掘報告書の全貌を知るには全巻の出版を待たなければならない。しかしながら、発掘終了から僅か4年で出版されたこの第1巻に、調査担当者らの発掘と報告に対する姿勢、意気込みが凝縮されていると考えられる。同じ西アジアのしかもシリアにおいて先史時代遺跡を発掘調査している評者らとしては、その内容に深い関心を抱くと同時に、報告書として在るべき姿を追究する本書執筆者たちの姿から

* 筑波大学歴史・人類学系助教授
Associate Professor, University of Tsukuba

** 筑波大学歴史・人類学研究科博士課程
Ph. D. Student, University of Tsukuba

学すべきものが多いと考え、本書評に取り組んだ。以下、章を追って論評していくことにする。

第1章「テル・コサック・シャマリの地形学および環境的背景」では、テル・コサック・シャマリがのる河岸段丘とその周辺地形の形成時期や形成プロセスに関して、地質学の小口高氏が地形や地質調査に基づき、時にはデジタル画像を駆使して解明している。その豊富なデータは、コサック・シャマリ遺跡の立地や歴史的背景を考えるための、確かな基礎資料を提供している。特に更新世各時代の河岸段丘面に関する情報は、コサック・シャマリから出土している旧石器時代各時期の石器群を用いた人々の活動領域などを考える資料となりうる。それに対して、遺跡の営まれた主要時期である新石器時代やウバイド期の地形・地質情報はやや寡黙である。第10章の「結論」で西秋良宏氏が地形・地質学的成果としてまとめているのは、コサック・シャマリが多様な資源獲得が可能である地形的な交差点に営まれていること、サリン川をつくる深い谷がユーフラテス河の数少ない渡河地点を形成していること、後氷期の早い段階でユーフラテス河とサリン川の水位が一時的に高く、このことが新石器時代層の侵食を招いた可能性があること、などであるが、第1章を読み返してみても、それがどこで論じられているのか明確ではない。地質学側と考古学側で十分な討論はあったのだろうか？

第2章「コサック・シャマリの社会歴史的環境」は、赤堀雅幸氏による現代のコサック・シャマリ村に関する民族誌モノグラフである。本章の内容は、まずこの調査目的を述べた後、コサック村と村人に関する一般的情報がまとめられ、周辺の地域社会の中で同村の位置、言語と宗教、家と親族関係、出自集団、村の過去と未来、といった流れで論が展開される。

地域社会の中でのコサック村の位置を論じた項目では、他村との婚姻関係や、村人の日常生活と非日常生活にかかわる物資の調達範囲、週市のサイクルから、同村の人々の行動範囲は北シリアの大都市であるアレppoを一つの極として、地域の中心市であるモンベジ、さらにコサック村を含む周辺農村が作る社会的ネットワークの中心町であるサリンと、段階的単線的に推移することを論じている。この議論は考古学的なセトルメント・パターンの解釈に民族誌的裏づけを与えるものとなる可能性があるものの、議論の骨子となる週市の理解には素朴な疑問がある。赤堀氏は村人達からの聞き取りに基づいて、モンベジを核としてユーフラテス河の東側7つの町々を結んだ週市のネットワークのあることを述べているが、日曜日と水曜日にはそれぞれ異なる南北の2つの町で同時に週市が立つことになっている。週市は基本的に同じ業者や仲買人たちが廻っている

ので、同日に遠く離れた町に出向いて市に参加することは考えにくい。これは恐らく、南北にそれぞれ別の週市の地域的ネットワークがあるのを、コサック村から眺めてしまっているために、一つのネットワークとして混同してしまっている可能性はないだろうか。もしそうだとすれば、コサック村近くのサリン町をこの地域の週市ネットワークの結節点として赤堀氏が挙げているのは、実態を反映していない事になる。地域の中心市であるユーフラテス河西岸のモンベジからみると、モンベジを含む週市ネットワークが同河東側のみの町々で構成されることも理解しがたい。モンベジを中心としてユーフラテス河の西側にも週市ネットワークは広がっていたはずである。サリン町を含む週市ネットワークは、モンベジを中心とした幾重にも重なる週市ネットワークの一つに過ぎないと考えられるのである。週市ネットワークを正しく把握するためには、一箇所のバザールの参加者に聞くだけでなく1週間かけて週市を追いかける必要があるのではないだろうか。

言語と宗教を扱った項目では、コサック村の若者へのインタビューから、非常に興味深い人間集団の分類法が紹介されている。分類1では他者としてベドウィン、町の人々、クルド人、トルコ人がいるのに対して、自分たちのことは農民 (*shawāya*) と認識している。この *shawāya* とは、*sha'ir* すなわちオオムギを栽培する人々であるという。現在のコサック村周辺では天水によるコムギ栽培が可能な南限に近く、コムギよりも乾燥に強いオオムギが栽培されていることも多く、なるほどと感心させられる認識名称である。ただ、分類1のような区分法がコサックの村人にとって一般的なのかどうかについての担保は明言されない。例えば評者の調査地である北西シリアのイドリブ県エル・ルージュ盆地では、他者としてのベドゥ (ベドウィン) に対して自己を認識する一般的名称はアラブであり、基本的に農民ではあるが「何かを栽培する人々」というようには呼ばない。

本章の中で赤堀氏の関心が特に注がれているのは親族関係を扱った項目であり、それは民族学者が民族誌的調査をおこなう際の基本調査事項とも言えよう。世帯＝ベイトを基準として展開されるコサック村の親族関係と出自集団の分析は的確で大変興味深く読んだ。考古学側から見て関心が深いのは、この項目の冒頭で述べられる次の報告である。「コサック村では何軒かの家が互いに壁を共有して造られており、それらは親族関係によって結ばれた集合体のように見える。しかしながら、壁の共有は親族関係とは連携しておらず、これらの家々で共通して使われる設備もない」。集落遺跡の発掘調査で遺構配置が明らかになった時に、考古学者は近接していたり壁を共有していたりする家々は、互いに近しい人間関係を有していたグループ (例え親族ではなくとも) と見なす傾向がある。考古学的証拠である住居とそこに実際に住んでいた人々の社会関係を直接観察することのできない考古学にとって、こうした民族誌的観察は考古資料から人間活動を復

元する際に援用できるきわめて大切な資料となる。そうした意味で赤堀氏の「壁を共有する家の集合は親族関係とは連携しない」という観察に興味を惹かれたわけである。親族関係に連携しないのならば、一体何と関係しているのだろうか？ 残念ながらその答えはどこにも書かれていなかった。

本章はシリアのユーフラテス河中流域のダムに沈みゆく小村落の貴重な民族誌的モノグラフとなっているものの、物質文化に対してやや冷淡であると感じるのは、評者だけだろうか。

第3、4章は、遺跡の層位と検出された遺構の報告であり、第3章が Sector A、第4章が Sector B の報告となっている。Sector A では地山上の18層が土器新石器時代、17層から10層が北方ウバイド前期、9層から4層が同後期、3層から1層が同終末期に、Sector B では地山上の8層が土器新石器時代、7層が北方ウバイド終末期、6層から5層がポスト・ウバイド期そして4層から1層がウルク中期に比定されている。両発掘区は連結されていないが、出土する土器の類似性から Sector A の3～1層と Sector B の7層が同時期に属すると報告されている。最下層の土器新石器時代に加え、両発掘区の調査成果を合わせると北方ウバイド前期からウルク中期までの長い居住の痕跡が確認されていることになる。

発掘は、慎重に可能な限りの正確さを期して進められたようである。精緻な観察にもとづいて建築相が細分されており、それぞれの遺構が使用された時間差が吟味されたうえで各層にまとめられている。遺構は各層ごとに節を設けて詳細な報告がなされており、遺構の図示にあたっては出土状況図と復元図を並べて提示するなど、わかりやすくまとめる工夫が凝らされている。検出された遺構は概して保存状態が良いのだが、何といっても注目すべきは Sector A の10層と Sector B の6、5層でそれぞれ発見された土器工房であろう。

北方ウバイド前期にあたる Sector A 10層の土器工房は、複数の部屋を持つレンガ積みの方形建物である。火を受けた痕跡を残し、保存状態がきわめてよい。建物内からは、土器焼成窯のほか、焼きあがった土器を保管したと考えられる倉庫などが見つかっている。ここから150個体を超える完形の土器が発見されており、写真に示された出土状況はまさに圧巻である。この遺構の写真は本書の表紙にも使われているのだが、考古学に携わる者であればこれを見て感嘆の声をあげるとともに、(調査者がこの出土状況をすべて実測する様子を想像して)ため息をついてしまうほどだ。これほど大量の土器群が一括して出土することは珍しく、第一級の資料であることに間違いはない。さらに、この遺構で興味を引くのは、土器製作に用いられたと考えられる製陶具が室内で出土している

点である。土器の成形から焼成まで、土器製作の各工程がこの工房内で行われた痕跡として解釈されている。

一方、Sector B ではポスト・ウバイド期にあたる 6, 5 層で土器工房が検出されている。6 層, 5 層を通して使用された 10×6 m ほどの方形建物の内部に 2 基の土器焼成窯が据え付けられているのだが、5 層の窯 (B501) が使用された時点では、6 層の窯 (B601) はすでに廃棄されていたと判断されている。二つの窯はともに 1.4 m 程の高さまで残っており、これほどまで残りの良い状態で発見される土器焼成窯の例は珍しい (ちなみに本書の裏表紙に使われているのがこの窯の写真である)。この土器工房に関連する遺構としては、窯のほかに、粘土の水簸施設や焼成前土器の一時保管場所と推定される施設などが検出されている。床面の造りや出土遺物の違いに基づいて工房内の場の機能が想定されているのに加えて、屋根が架けられていた部屋があることから年間を通じた操業が推定され、さらにこの工房の位置する場所が溝によって居住区とは画されていることなどが指摘されている。こうした点に基づいて、本工房が組織化された専門的な土器生産の場であったと解釈されるに至っているのは特筆すべき点である。

これら Sector A, Sector B 双方の土器工房は、ともに土器の専門的生産の痕跡を示すものであるが、注目すべきは著者らがこれらを単なる専門化の証拠として同等に対置していない点である。著者は、Sector A のウバイド期の施設に関しては、併せて出土する磨石類や石器などの存在を根拠に、集落内での土器製作の場と日常生活の場が完全には分離していない状況であると判断している。一方で、Sector B のポスト・ウバイド期の施設は、居住区と土器製作の場が分離されていること、年間を通じた操業が予想されることを根拠に、日常生活とは分離した、完全に専門化された生産体制確立の証左として位置づけられている。現代シリアの土器工房の民族誌例ではほとんどがここで言う後者に区分されると思われるが、そこに展開される強い日常生活臭に触れている評者としては、完全な専門工人達が日常生活品を土器工房に持ち込まないという前提に必ずしも組しない。しかしながら、一つの遺跡においてウバイド期からポスト・ウバイド期にかけての土器製作設備、製作技術の時間的变化を明示し、そこに土器製作にかかわる社会的変化までも見出そうとした意欲は、高く評価しなければならない。

第 5 章では、放射性炭素年代測定法による絶対年代の測定結果が示されている。北方ウバイド前期の Sector A 10 層, ウバイド終末期の Sector A 1 層から採取された資料からは、それぞれ約 6,100 BP, 5,900 BP と、考古学的年代観に合致する年代が得られている。しかし、その反面、それ以外の層からの資料の測定年代と、考古学的手法にもとづいて推定されている年代観と間には開きが見られ、これらの測定結果をそのまま利用

するのは難しいようである。著者によれば測定用に採取した分析資料の質が十分ではなかったこと、資料が採取されたコンテキストが必ずしもオリジナルのものではなかった可能性があることなどが、この不一致の理由とされている。著者は他の遺跡と比較して齟齬のない考古学的な年代観を優先しているので、テル・コサック・シャマリの年代的位置づけが大きく揺らぐことはないのだが、いずれにせよこれらの測定年代は、遺跡間での比較資料としては扱いにくいものとなってしまった感がある。

第6～9章は遺物を扱った章であるが、本書で報告されるのは旧石器時代と新石器時代の遺物に限られる。テル・コサック・シャマリの主要な居住時期であるウバイド期以降の遺物については続刊を待たねばならない。旧石器時代および新石器時代の居住の痕跡はごくわずかで、特に旧石器時代の遺物は後の時期の層に混入して確認されているのみである。地山に掘り込まれたピットを主とする新石器時代の居住層も、それぞれの発掘区の下層、Sector A 18層および Sector B 8層で確認されているにとどまる。遺物の出土数もかなり限定されたものであり、断片的なものであるといわざるをえない。しかしながら各章の報告では著者陣によって遺物の分析、検討が的確になされており、たとえ断片的な資料であっても十分に利用価値の高い資料としてまとめられうる好例といえるだろう。遺物の報告は、旧石器時代の石器、新石器時代の土器、石器、その他の遺物に分けられ、それぞれ独立した章で扱われている。

第6章で扱われている旧石器時代の石器は、すべて後の時期に属する層に混入した状態で発見されている。本来、このような出土コンテキストの明確でない遺物は資料として扱いにくく、攪乱による混入遺物として補遺的な扱いを受けるにとどまることもしばしばである。ところが本章においては、報告者である西秋氏の確かな見識によって旧石器時代の石器群がより分けられ、中部旧石器時代、続旧石器時代の2つの独立した石器アセンブリッジを抽出することに成功している。

中部旧石器時代の石器群は Sector A, Sector B 両発掘区から見つかっている。ルヴァロワ石核、ルヴァロワ尖頭器など、時期決定の指標となる典型的な石器類が含まれ、報告書中には詳細なタイプ・リストが示されている。一方、続旧石器時代の石器群は Sector A のみで検出されている。三日月型細石器、ビュラン、スクレーパーなどに代表され、マイクロ・ビュラン技法の存在も確かめられている。周辺の続旧石器時代の遺跡で表採された石器群や、より下流のユーフラテス河畔に位置するテル・アブ・フレイラの石器群との類似性が指摘されている。

このように、上部旧石器時代の痕跡を欠き、その前後の中部旧石器時代、続旧石器時

代の痕跡が残されるというパターンが、北シリア内陸部の遺跡でよく見られるとの指摘は示唆に富む。テル・コサック・シャマリの周辺地域でも同様のパターンが確かめられていることが言及されている。

第7章「コサック・シャマリ出土の新石器時代土器」は、西アジアの初現期土器の研究者として著名なマリール・ルミエール氏が執筆している。コサック・シャマリにおいての新石器時代文化層は薄く、遺構も保存状態の不良な石列を除くとピットくらいしか発見されていない。したがって当然のことながら、新石器時代土器の出土コンテキストは議論の対象とならず、その出土量や復元できる器形も限られている。このような限定があるにもかかわらず、熱心で詳細な分析が加えられている。特に胎土分析から、粘土の採掘場所と土器、レンガへの粘土の使い分け、搬入土器の区分が論じられるなど、限定的な資料でも有効な研究が可能であることを示している点は敬服に値する。

しかしながら、評者はルミエール氏がここで行っている土器分類の基本的姿勢に疑問を感じざるを得ない。それは、ルミエール氏がそれまで積み重ねてきたポッコラスやテル・サビ・アビヤドでの土器分類基準をコサック・シャマリの土器分類に過剰なほど当てはめようとしたために、これらの土器分類基準にないコサック・シャマリで主体をなす土器に、名称が与えられないという事態に陥ってしまったことを指す。暗色磨研土器 (Dark-Faced Burnished Ware)、灰黒色土器 (Gray Black Ware)、鉱物混和粗製土器 (Mineral Coarse Ware) という既定の3種類の土器は全部合計してもコサック・シャマリの土器インダストリーの10%にも満たない。それに対して90%以上を占める土器が“Bulk” (大部分とでもいう意味なのか?) に分類されてしまった。しかしながら、Bulkの項目を読めば明らかなように、そのほとんどが明色系の地をもつスサの混和された土器で、その多くに磨研が施こされていて櫛による刻文を有していることが分かる。評者はある遺跡で出土した土器はその遺跡で構築された土器インダストリーの基準でまず分類し、それから他の遺跡や地域との比較研究を行うべきだと考えている。コサック・シャマリで主体をなす Bulk についても、スサ混和明色土器 (Chaff-Tempered Buff Ware) などの名称を与えて明確に区分すべきであると考えるが、如何なものであろうか。

実はこのことは単に土器に名称を与えるということの意味するのではなく、西アジアの土器新石器時代に存在した各土器インダストリーの伝統の中で、コサック・シャマリの Bulk をどこに位置づけるかという問題に直接関わっている。コサック・シャマリはルミエール氏の言う第3ステージ (Le Mièrre et Picon “Les débuts de la céramique au Proche-Orient”, *Paléorient* 24/2) の年代にあたるが、この時代にルミエール氏は北シリア・キリキア、北メソポタミア、ザグロスという3つの土器分布圏が存在したと考えて

いる。そしてコサック・シャマリ出土土器は、器形と装飾法から、このうちの北シリア－キリキア分布圏に帰属しているとするのである。西アジアの土器新石器時代にルミエール氏が想定するような大土器分布圏が存在したかどうかにも評者は疑問があるが、もし器形と装飾という属性ではなく、地の色と胎土つまり明色地で胎土にスサを混和するという属性を重視するなら、これは明らかに北シリア－キリキアではなく北メソポタミア土器分布圏に帰属させるべき土器である。土器に名称を与える時、その特徴を端的に表す第一属性から命名することが多い。ルミエール氏も基準として採用してきた命名法であり、暗色磨研土器、灰黒色土器、鉱物混和粗製土器など多くの場合地の色や胎土などが名称として採用されている。Bulk にこれを当てはめるなら上述したようにスサ混和明色土器となってしまう、ルミエール氏の意図するような北シリア－キリキア系土器のイメージとほど遠くなる。うがった見方をするならば、このようなイメージを避けるために敢えて Bulk などという名称を付したのではないかと、考えてしまうのである。ともかく、評者が考えるコサック・シャマリの新石器時代土器の位置づけは、ルミエール氏とは大分異なることになる。ただ肝心なことは、ルミエール氏も的確に指摘しているように、コサック・シャマリの土器インダストリーがユーフラテス河をやや上流に遡った同じ東岸に位置するアカルチャイやテレイルット、さらにバリフ川流域のサビ・アビヤド8～7層出土土器と最も近似な関係にあることであり、この時期にユーフラテス河中流域からバリフ川流域を含めた狭い土器分布圏が存在していたことこそが確実なのである。

第8章は新石器時代の石器についての再び西秋氏による報告である。テル・コサック・シャマリの位置するユーフラテス河中流域では先土器新石器時代遺跡の調査が盛んである一方、土器新石器時代の遺跡の発掘、報告例が少なく、本章によるこの時期の石器群の紹介は、それだけでも貴重な資料といえる。

ただし、旧石器時代の石器群同様、この時期の資料も数量的にかなり限定されたものであり、十分な分析と考察を導き出すのは容易でないといえるだろう。石刃製作を基盤とする規格化した石器作りの衰退した時期の石器群とあって、製作過程の復元といった技術論的アプローチも分析手法として有効ではない。また、石器の形態的な分析をするにしても、凡庸な報告書であれば退屈な事実確認の記述に終わってしまうところである。

にもかかわらず、本章では各石器のタイプ・リストが示されることはもとより、剥離の進行段階別による石核の分類や、礫皮の付きかたによる剥片の分類を行うなど、定型ではない石器に対しても細かい注意の目が向けられており、それらの分析に可能な限りの手続きがとられている。特徴的な石器だけを優先して扱うのではなく、「その他」の

石器についても具体的、客観的なデータが示されているのである。そのため、読み手としては何が「出土した」のかを知ると同時に、何が「出土しなかった」のかを知ることができ、テル・コサック・シャマリの石器群の全貌を具体的なデータとして把握することが可能となるわけだ。

本章ではさらにこれらの石器群の、時期的、地域的位置づけが試みられている。著者は、規格的な石刃製作の痕跡がほとんどないこと、三日月形の鎌刃が見られることなどをあげ、テル・コサック・シャマリの石器群がユーフラテス河流域からバリフ川流域にかけての土器新石器時代遺跡にみられる石器群の特徴に類似すると指摘している。特に隣接する地域であるバリフ川流域の遺跡であるテル・ダミシリアやテル・サビ・アビヤド1号丘との比較が詳しく述べられているが、西秋氏がかつてこれらの遺跡の石器群を実見し分析している本人だけに、こうした比較検討が説得力の高いものとなっていることは言うまでもない。

以上本書の章構成を追いながら、各章の報告について論評を加えてきた。本書によって紹介されたテル・コサック・シャマリの調査成果の要点は、次の3点に大別されよう。第一に北方ウバイド前期からウルク中期にかけての連続した堆積と土器工房の発見。第二に旧石器時代、新石器時代の新資料の提示、そして第三には地質学、民族学的研究による成果、である。

ウバイド期、ポスト・ウバイド期の資料は極めて残りの良い第一級の資料であり、この時期の遺構、遺物がテル・コサック・シャマリ調査のハイライトであることには異論がないだろう。したがって、その報告である第3、4章に関しては、事実記載としての報告そのものが、すでに貴重な資料として価値あるものになっているといえる。もちろん、その報告が精密な調査と、調査者の鋭い観察力に裏付けられたものであることはいうまでもない。

一方、旧石器時代、新石器時代の資料は、むしろ断片的なものに過ぎない。しかしながら、報告書としての真の価値が問われるとき、旧石器時代、新石器時代の遺物を十分に扱った本書のもつ意義は大きい。この調査にかかわる研究者の多くが、旧石器時代、新石器時代の第一線の研究者であることを知る読者としては、著者陣のもつ高い能力を完全に発揮させ得るに十分な資料が得られなかったことに遺憾の念を覚えながらも、単に資料をカタログ化した報告書ではなく、しっかりとした考察を含む内容に仕上がっている本書に満足させられる。その出来は出色であり、本報告書の冒頭に述べられている「ウバイド期社会の解明が本調査の目的である」という記述を思わず疑ってしまうほど、十分な熱意が込められている。

ただしその一方で、土器新石器時代におけるテル・コサック・シャマリの地域的位置づけについてはやや疑問が残る点がある。土器の分析、石器の分析ともに、テル・コサック・シャマリがユーフラテス河からバリフ川にかけての狭い地域圏に属するという点で一致している。しかし、さらに広い枠組みでの地域性を見ると、土器と石器の間ではずれがあるようだ。ルミエール氏は北西シリアからバリフ川流域までを北シリア-キリキア土器圏と括り、その中にテル・コサック・シャマリを位置づけている。一方西秋氏は、石器からみた大枠でのテル・コサック・シャマリの位置づけについては言及してないのだが、テル・コサック・シャマリの石刃製作の衰退を北シリアの土器新石器時代の特徴としてあげている。しかし、ここでの北シリアにはルミエール氏の言う北西シリアやキリキアは含まれず、石器から見た場合、テル・コサック・シャマリと北西シリア、キリキアとの関係はむしろ弱いということになるだろう。

もちろんこれは、地域間での類似性、相違性をどのレベルで捉えるかという問題であるし、また、土器の地域性と石器に見られる地域性が常に合致するとは限らないので、それぞれの著者の主張に差異が生じる場合もあろう。ただし、総合的判断として遺跡の位置づけをどう捉えるかという記述が特に見受けられないため、両者の間で見解に相違があるような印象が残ってしまったのではないだろうか。もちろん、本書は3巻ある最終報告書中の第1巻として出版されたものであるがゆえに、著者陣の最終的な見解は続刊の刊行を待って判断せねばなるまい。

しかしながら、こういった疑問を残してもなお、本書の功績が何ら損なわれるものではないことは強調せねばならない。良い資料が得られれば良いカタログを作るのは容易である。困難なのは、調査によって得られた資料がいかなるものであっても、そこから何が得られるのか、著者の考えを示していくことである。本書は、学術調査の報告書として価値ある一書である。

(第1, 2, 7章の書評は常木, 第3～6, 8章の書評は前田がおもに担当し、全体を兩人でまとめた。)